



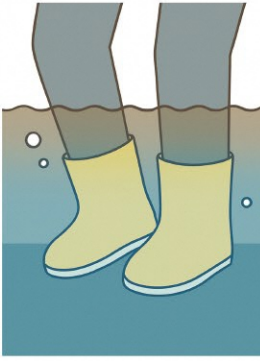
避難のポイント(風水害時)

自宅から安全な場所へ避難する際は、台風の接近や大雨が降り始める前、また道路や家屋が浸水する前に移動を完了することが大切です。大雨の中で避難する場合には、以下のポイントを参考にしながら身の安全を確保してください。

●徒歩で避難するときの注意点



動きやすい服装と、必要最小限の荷物で避難しましょう。



歩きやすい「履物」をはきましょう。
長靴は水が入ると重くなるのでやめましょう。



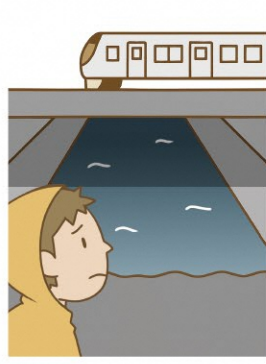
歩いて避難できる深さは、ひざ下程度といわれています。流れによって足をすくわれないよう、注意しましょう。



地面が見えにくくなり、マンホールや水路などに落ちてしまう危険性があります。棒を使い、足下に注意して歩きましょう。



夜間の避難は周りの状況が確認しにくく、非常に危険です。暗くなる前に避難しましょう。



地下道(アンダーパス)や窪地には、水が溜まっているおそれがあります。あらかじめ浸水しない避難ルートを確認しておきましょう。

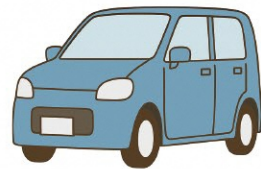
●自動車での避難について

避難先へは徒歩での移動が原則ですが、要配慮者については、自動車による避難移動も考えられます。

自動車で避難する場合には、避難先までの経路が冠水しないか、避難ルートが想定浸水深の高い区域に含まれていないかなど、安全性を確認しておきましょう。

！避難するときに気をつけること

- 移動時に燃料切れとならないよう、こまめな給油を心がけましょう。
- 豪雨時の移動は非常に危険です。早めの避難を心がけましょう。
- 駐車場所の安全を確認しましょう。



●地域での助け合い



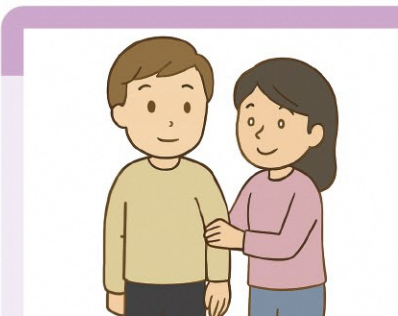
手足が不自由な人には

2人で抱える場合は、1人が背中側から両脇に手を入れて抱きかかえ、もう一人が両脚を持って移動しましょう。



耳が不自由な人には

口をハッキリと開け、相手にわかりやすいように話しましょう。手話、筆談、身振りなどの方法で正確な情報を伝えましょう。



目が不自由な人には

災害時には、声をかけ情報を伝えましょう。
誘導する場合は、支援者のひじ辺りを軽く持ってもらい半歩前をゆっくり歩きましょう。



外国人には

身振りや手振りで話しかけ、孤立させないようにしましょう。



浸水被害を軽減する方法

浸水被害を少しでも軽減することは、建物や家財への損害を抑えるだけでなく、自宅の安全や家族の安心にもつながります。事前に家庭でできる対策を講じることで、被害を最小限に抑えることが可能です。

普段から

◆保険・共済に加入しましょう

浸水被害からの生活復旧には、想像以上の費用がかかります。水害に対応した保険や共済に加入しておくことで、生活復旧への支援が受けられます。



大雨が予想される段階

◆屋外の作業は大雨が降る前に

◆屋内での作業



風で飛ばされそうな植木鉢やごみ箱、物干し竿などは室内に入れておきましょう。



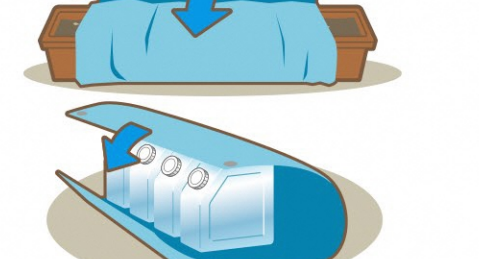
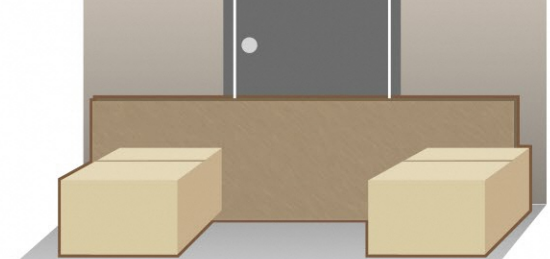
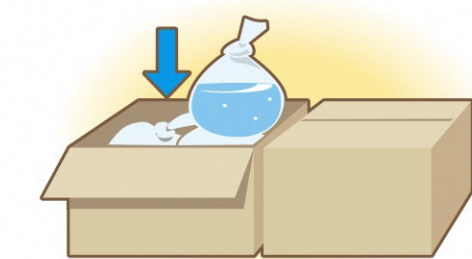
窓や雨戸などはしっかりと閉め、補強しておきましょう。



水の準備や停電に備え、携帯電話の充電などしておきましょう。

◆簡易水防工法で浸水を防ぎましょう

簡易水防工法は、家庭にあるものを使って家屋への浸水や流入を防ぐ方法で、水深が浅い段階では有効です。玄関などの出入口だけでなく、床下への浸水の防止にも重要です。

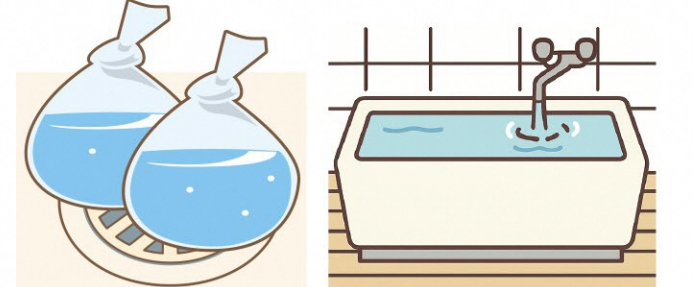


40リットル程度の容量のごみ袋を二重にして、出入口に板などを設置し、浸水を防ぎます。中に半分程度の水を入れて締めます。これをダンボール箱に入れ、連結して使用します。

水を入れたポリタンクや土を入れたプランターをレジャーシートで巻き込み使用します。

◆思わぬ場所からの浸水を防ぎましょう

- 建物の周辺が浸水すると、下水が逆流して排水口などから水が噴き上がることがあります。水を入れたビニール袋などを置いて、逆流を抑えましょう。
- 風呂の浴槽の水は流さずに溜めておきましょう。下水の逆流を防ぐだけでなく、生活用水としても利用することができます。



◆大事なものは高いところへ

水に浸かると、家財や家族の思い出の品が損なわれてしまうおそれがあります。また、浸水後は大量のごみが発生することもあります。大事なものはできる限り高いところへ移動させましょう。